国際会議の桜並木

Memorial Trees for Chitose International Fora

川辺 豊（Yutaka KAWABE）
公立千歳科学技術大学　応用化学生物学科

Row of cherry trees are being formed in the campus of Chitose Institute of Science and Technology (CIST) located in Hokkaido, Japan. The trees were planted as the memories of international conferences held almost every year at this university of science and engineering. On the sign plates set on the side of each tree, show the autographs of speakers of special lectures and plenary talks including several Nobel prize laureates. However, defacement of the plates is somewhat noticeable due to the passage of time. The author made this note as a memorandum for the past events.

公立千歳科学技術大学（以下、本学）へ至る美々西通と名付けられた市道から大学玄関前のロータリーへ向って歩むと、右手に桜並木がある。折れてその並木の間を進むと、今度は左手建物近くに一叢の桜樹が見える。本学の桜は令和 5 年の市の広報誌である『広報ちとせ』5 月号にも紹介され、少しずつ知る人が増えているかもしれない [1]。桜の多くは本学で開催された国際会議を記念植樹によるものである。

本学が私立の「千歳科学技術大学」として開学してから令和 5 年で 26 年目になる。公立化した現在でも学部収容定員が千人に満たない小規模校ではあるが、開設以来ほぼ毎年国際会議を開催してきた。Chitose International Forum on Science and Technology（略称 CIF）がその名称である。当初は後半が on Photonics Science and Technology となっていた筈である。いずれにしても四半世紀の春秋を重ねているのだが、系統的な記録と言えば本学が刊行した『千歳科学技術大学フォトニクス研究所紀要』とその後継の『公立千歳科学技術大学紀要』（いずれも電子版のみ）に開催概要の記事がある程度で、それも第 12 回以降に限られる [2]。会議の成果としてその都度プロシーディング集が発行され、本学図書館にも所蔵されてはいるが、なかなかデータベースでヒットしないところを見ると、早くも消失の危機にあるのかもしれない。

もちろんあまたの権威ある学会に比すれば渺たるものかもしれないが、それでも開催に尽くされた先人の労や、貴重な成果を公表した当時の研究者、学生の努力を思うと、何処かに目次、書誌だけでもまとめて置きたいというのが筆者の一つの宿願である。とは言え、すぐに全てを行うことは難いので、まずは開催を記念して植えられた桜の位置と、銘板に刻まれた基調講演者の姓名を一覧にまとめるべく本稿を認めた。

銘板の現物は早くも劣化が始まっており、早晩廃頽に瀕する可能性もある。桜もまた将来、枯死する恐れも無きにしもあらずで、個人的には退職を目前にして起稿を思い立った次第である。

本学の国際会議の事始めは開学の年に開催された ICONO4 で、正式には 8th Iketani Conference, 4th International Conference on Organic Nonlinear Optics であった。これは発足時の学長であった故佐々木敬介教授らが中心となって開学に合わせて招致したものである。残念なことに佐々木学長は開催（1998 年 10 月 12 日～15 日）直前の 10 月 5 日に闘病の末、長逝

された。悲嘆と忽忙の中での開催であったが、会議自体は盛会裡に終了し、閉会の式辞の前か後か、当時フロリダ中央大に居たジョージ・スティグマン（George Stegeman）教授の音頭で故学長の遺徳を顕彰する基金を設けるべくその場で寄付が募られた。現在まで引き続いて本学の学生に贈られる「佐々木賞」の濫觴はここにある。筆者も及ばずながら寸銭を投じたものである。一年後に第一回の CIF が開催された際は、会議の場で賞が授与されたと記憶している。この時の在籍学生は 2 年次が最高学年であったが、その中には早くも研究室に出入りしてポスター発表を行った者も居た。

Figure 1. Cherry tree and its sign plate planted for the memory of CIF’3 held in 2002. (Photograph taken on Apr. 29th, 2023 by the author)

ICONO4 の開催中に記念植樹が行われ、これが恒例となって国際会議の開催ごとに桜が植えられて今に至っている。主たる基調講演者（Special Lecturers または Plenary Speakers）の署名が樹の脇の銘板に刻まれている。一例として CIF’3 の際の桜を Figure 1 に示す。

以下に会議の一覧、日程及び基調講演者名とその所属（当時）を示す。日本出身者については［　］内に日本語表記を付した。

1998　ICONO4　10 月 12 日～15 日

(S) Alan J. Heeger（米国カリフォルニア大サンタバーバラ校、2000 年ノーベル化学賞）

1999　CIF'1　10 月 12 日～13 日

(S) Andre Persoons（ベルギー、ルーベン大）

2000　ISOM2000 9 月 5 日～8 日

2001　CIF'2　9 月 6 日～8 日

(S) Alan. G. MacDiarmid（米国ペンシルベニア大、2000 年ノーベル化学賞）

(S) Yasuhiro Koike［小池康博］（慶応大）

2002　CIF'3　10 月 6 日～8 日

(S) Naoya Ogata［緒方直哉］（本学第 2 代学長）

(P) Paras N. Prasad（米国ニューヨーク州立大バファロー校）

2003　CIF'4　12 月 3 日～4 日

(S) Heinrich Rohrer（スイス、1986 年ノーベル物理学賞）

2004　CIF'5/IS-EMD2004（International Session on Electro-Mechanical Devices 2004 共催）　10 月 19 日～20 日

(P) Tatuso. Izawa［伊澤達夫］（NTT エレクトロニクス、のち本学第 3 代理事長）

(P) Un-Chul Paek（韓国、光州科学技術大学）

(P) Nobuo Saito［斎藤信男］（慶応大学）

2005　CIF'6　12 月 9 日～10 日

(P) Christian Kloc（米国ベル研究所）

(P) Katsumi Tokumaru［徳丸克己］（筑波大）

2006　CIF'7（Chitose International GP Forum 共催）　11 月 27 日～28 日

(P) Tomonori Aoyama［青山友紀］（慶応大）

(P) Liang-Yao Chen（中国上海、復旦大）

2007　CIF'8　11 月 29 日～30 日

(P) Bernard Kippelen（米国ジョージア工科大），

(P) Yasuhiro Kioke［小池康博］（慶応大）

2008　CIF'9（KJF2008 と共催）　10 月 23 日～25 日

(P) Alan J. Heeger（カリフォルニア大サンタバーバラ校、2000 年ノーベル化学賞）

(P) Toyoki Kunitake［国武豊喜］（北九州大）

2009　CIF'10　11 月 13 日～14 日

(P) Werner J. Blau（アイルランド、トリニティーカレッジ）

(P) Makoto Kikuchi［菊池眞］（防衛医大）

2010　CIF'11　10 月 14 日～15 日

(S) Hideki Shirakawa［白川英樹］(2000 年ノーベル化学賞)
(P) Nasser Peyghambarian（米国アリゾナ大）

2011　CIF'12　10 月 13 日～14 日
(S) Akira Suzuki［鈴木章］(北大、2010 年ノーベル化学賞)
(P) Masataka Nakazawa［中沢正隆］(東北大)
(P) Andreas Offenhäuser（ドイツ、ユーリヒ総合研究機構）

2012　CIF'13　10 月 11 日～12 日
(S) Masatoshi Koshiba［小柴昌俊］(東大、2002 年ノーベル物理学賞)

2013　CIF'14　7 月 8 日～9 日
(S) Tetsuhiko Ikegami［池上徹彦］(文部科学省)

2014　CIF'15　10 月 2 日～3 日
(S) Akira Fujishima［藤嶋昭］(東京理科大)

2015　CIF'16　9 月 30 日～10 月 1 日
(S) Eiichi Negishi［根岸英一］(米国パデュー大、2010 年ノーベル化学賞)
(S) Toyoki Kunitake［国武豊喜］

2016　CIF'17　11 月 14 日～15 日
(S) Yoichi Takahashi［高橋洋一］(大日本印刷)
(S) Nobuaki Kawakami［川上伸昭］(文部科学省)
(P) James Grote（米国空軍研究所）

2017　CIF18　10 月 9 日～10 日
(S) Takayuki Nakao［中尾孝之］(日本旅のペンクラブ)
(S) Hideki Ishida［石田秀輝］(東北大、地球村研究所)
(P) Julia Krohmer（ドイツ、ゼンケンベルク自然史協会）
(P) Shun-ichi Kamemaru［亀丸俊一］(北見工大)

2018　CIF19　10 月 21 日～22 日
(S) Ken Seno［妹尾堅一郎］(産学連携機構)
(P) Yoshihisa Yamamoto［山本喜久］(ImPACT)

2019　CIF20　10 月 4 日
(S) Kaori Fujita［藤田香］(日経 BP)
(P) Clercq Lucien-Laurent（北大）
(P) Ryuichi Yokota［横田隆一］(千歳市)
(P) Masanori Tanno［丹野正則］(アーキビジョン 21)
(P) Kazushi Misawa［三澤計史］(千歳青年会議所)

2021　CIF21　10 月 15 日
(P) André Laschewski（ドイツ、ポツダム大）

（P）Naoko Yanagihara［柳原なほ子］（コンサルタント）

2022　CIF22　9 月 30 日

（S）Mareki Honma［本間希樹］（国立天文台）

ここで（S）は Special lecture（特別講演）、（P）は Plenary lecture（基調講演）を意味する。特別講演は市民、学生をも対象とした比較的一般向けの色彩が強いもので、参加費は不要、通訳を入れた場合もあり、日本語で行われたケースも多い。基調講演は学術的な内容が主だが、両者に厳密な区別があったわけでは無い。ここでは銘板の記載に従った。署名者の人数が会議ごとに大きくばらついているのは、時どきの実行委員会の判断によるものであり、必ずしも基調講演者を網羅しているわけでは無いことを注記して置く。

CIF’7 共催の GP Forum の GP は Good Practice の意味で、当時文部科学省が主導した大学教育の施策プログラムで、本学も複数回採択された実績を有する。また、CIF’9 を共催した KJF2008 は正式には 20th Korea-Japan Joint Forum on Organic Materials for Electronics and Photonics で、毎年交互に日韓のどちらかで開催されている有機エレクトロニクス関係の国際会議である。

数字の前のアポストロフィーの有無はどの程度厳密に区別されていたか、やや曖昧な部分もあるが 18 回目以降明確に廃したのではなかったか。ただしこれらと別にハイフンを挿入した表記もある。

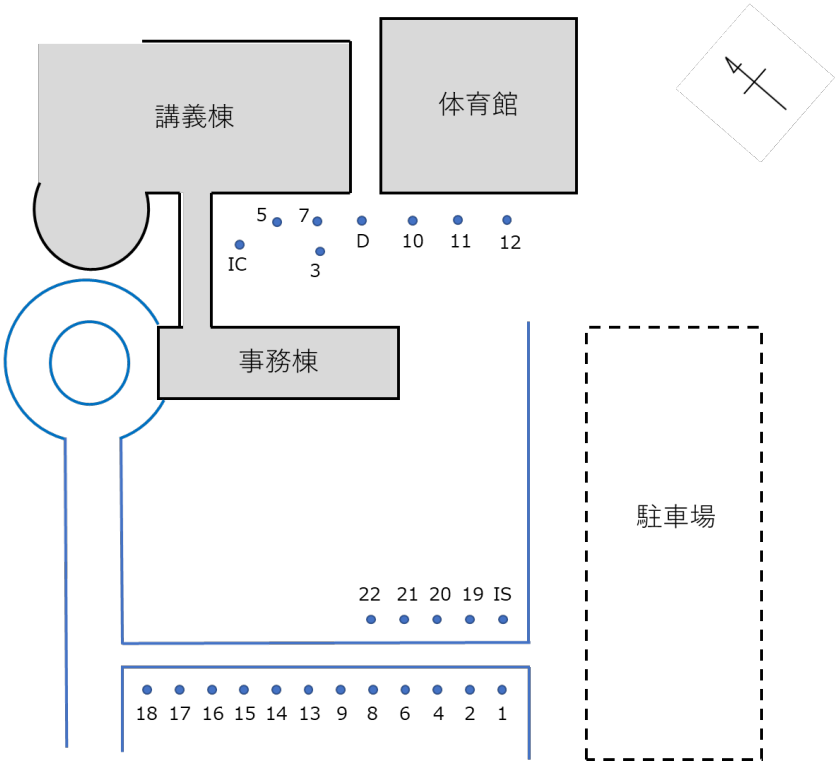

Figure 2. Map for the cherry trees planted for the memories of international fora held at Chitose Institute of Science and Technology. Numbers indicate the those of CIF. For other letters, refer to the text below.

2023 年時点の桜の配置を Figure 2 に示す。数字は CIF の回数を示している。また、IC は ICONO4、IS は 2000 年に開催された ISOM（International Symposium on Optical Memory 2000）の際の植樹である。別に D と記した植樹があるが、これは国際会議とは無関係で、2008 年に日本で開催された洞爺湖サミットに連なる一連の行事のものである。この 7 月 10 日にハンス=ヨアヒム・デア駐日ドイツ大使が本学を視察し、学生に向けて行った講演を記念している。これはもちろんドイツ出身のカートハウス教授の寄与、協力が大きい。ちなみに、このときのサミット参加国は現在の G7 にロシアを加えた G8 及び EU であり、ロシア首脳はメドベージェフ大統領であった。時の移ろいを感ぜざるを得ない。

文　献

[1] 広報ちとせ、2023 年 5 月号、p20
[2] 『千歳科学技術大学フォトニクス研究所紀要』、『公立千歳科学技術大学紀要』は本学図書館の学術機関リポジトリからダウンロード可能である。